９月学習会のご案内

平成２４年９月３日

残暑は続いても，時は待ってはくれません。

子どもたちが学校に帰ってきます。「暑い～」と話しながら，でも元気を振りまいてくれそうです。長い夏休みは終了。まだまだ暑い日は続きそうですが，涼しくなるまで夏休みが続くわけではありません。行政で決められた日は変えようがありませんからね！ならば自分の意志で節目を作るしかありませんよね！自然に出てくる子どもの声は大切に受け止めながらも，新たなスタートをきっちり切れるように教師が心がけていなくては，時間がもったいないですね。

さて，秋には研究会が目白押し！以下の２つをチェックしてください！

中国地区国語教育研究大会

１０月２６日（金）岡山市立鹿田小学校

「おもしろ見つけ」の学習を全学年で公開します！夏の研修会，夏期特別国語講座と検討を重ねてきた物語の指導案もついに完成！岡山発の読む方策の１つの形が，中国大会という場を通して発信されます。鹿田小学校の先生方が夏の間，しっかりと準備を重ねてこられています。その一言一句に魂がこもっていますよ。

２次案内の黄色い紙は各学校にすでに配布されています。お手元に資料がなくても，「岡山県国語」とネットで検索してくださいましたら詳しいことがわかりますよ。みなさん，お申し込みをして，ぜひともご参会ください！

岡山大学教育学部附属小学校研究発表会

１１月３日（土）岡山大学教育学部附属小学校

近年，常に６月に公開されていた研究発表会が，今年は１１月３日・文化の日に公開です。１日開催で午前中に３時間の授業公開，午後から協議会と講演が行われます。もちろん全教科の授業が行われます。国語科は低・中・高学年の授業がさまざまな読むことの方策に則って展開します。鹿田小学校が公開される授業とのネタかぶりは一切ありません。

詳細はこの文書とともにある資料をご覧ください。ネットで「岡大附属小」と検索してくださったら７日には最新情報がアップされていると思います。こちらもお待ちしています！

９月からの国語を語る会も今までの展開と少し矛先が変わります！みなさんが日頃思われていることをお話ください！

日　時　　平成２４年９月２２日（土）９：３０～１２：００
場　所　　岡山大学教育学部附属小学校　２階　会議室
TEL(086)272-0511　　FAX(086)271-3455
連絡先　　小野　桂（おの　けい）　　MAIL　keikeioh@fuzoku.okayama-u.ac.jp
内　容　　「説明的な文章の授業，どのように取り組んでいますか？」

8月の学習会の報告

（文責　近藤昌子）

８月の語る会は，高知大学　教授　渡邊春美先生をお招きして，「小学校と中・高等学校の古典古文学習」についてのお話をいただきました。

田中先生

〇渡邊先生は古典文学の古文を中心に研究をされている。お話を聞きながら，小学校や中高の役割を考えていきたい。

〇今の課題について，日頃思っていることを７人の先生に語ってもらい，その後渡邊先生からのお話をいただく。

石戸谷さん（三省堂中学校教科書出版部）

なぜ「役に立たなそうな」古典を学ばなければならないかという疑問に向き合わなければならないということが課題。

田中先生

小学校では言語文化はあっても言語生活力の扱いが中心　中，高になると言語文化のウエイトが大きくなる。言語生活力にどうつながるのかは興味がある。

小野先生

伝統低名言語文化の授業では，内容理解と音読・暗唱は対極に置かれることが多い。

内容理解がないと音読や暗唱も親しめないのではないか？論語，徒然草，狂言，それぞれの楽しみ方として内容面のおもしろさ，言葉の響きのおもしろさを求めていくことで，言葉の力としておさえている。小学校の役割として中・高へのつながりとしてどこまで踏み込んでいってよいのかつなぎの部分が見えてきたらよい。

田中先生

リズムとものの見方・考え方とある。例えば小野先生の論語の実践では，５章ほど取り上げて，書き下し文を読み込んだ中で，それぞれの内容について大枠としては同じでもそれぞれが違うという認識まで踏み込んでいた。文科省の求めている内容は小野先生の実践ほどではないと思われるが，切り込んだ実践だった。

秋森先生（吉備中学校）

能力の違いに戸惑う。踏み込んで身に付けている子どもと全く分からない子がいる。→ちゃんと読むことは基本だが興味関心が薄れていく。中学校の段階でどこまで引き上げればよいか。他教科等でも身に付けた日本文化と現代の文化との違いや魅力，愛着，価値観の擦れ合いを古典の授業の中でしていきたい。文化としての古典教育をどう伝えていけるか。

小学校では，毛嫌いしない子どもたち。現代文の話し合いでの読み深めができることを求めたい。

田中先生

同じ能力を使ってどれだけ古文に向かっていけるか，という示唆。

赤木先生

音読，朗読，暗唱の授業が多く，いかにその活動に意欲をもって向かうことができるかを工夫されている。小野先生の実践では追求活動がなされ比較の中で内容理解と楽しみ方を習得しているが，少数派と思われる。何をもって「親しむ」か？活動は「音読や朗読」が取り上げられている。古典の音読や朗読は，現代文との違いがあるのかどうか？

中学校では書き下し文が中心。単元後半で原文を提示するのが多い。どう出会わせるのが「親しむ」につながるのか。最終的には単に音読できるだけではだめで，昔の人のくらしと比べる，つなげるなどしたときに古典のおもしろさを実感するのではないか。

田中先生

暗唱が見直されてきたのが今回の学習指導要領の特色。声に触れて感じる部分がある。暗唱のよさという側面があるのでは。言語活動のあり方として古典にどう触れるかが課題としてある。

枕草子の取り上げ方など，取り上げる作品の小，中，高の違いにも関心がある。

小川先生

学生の頃は古典と漢文は好きだった。古典の辞書を引きながら原文の意味が見えてくるのが楽しい。そこにひみつ。現場の国語教室で忘れられている素読，朗読，暗唱の風が吹いてきた。現代国語でもよいのだが，こうした風が活動として入ってきた。活動があっても学力が付かないという国語授業にならないためには，活動だけではだめで，おもしろさへの気付きがあったとき活動が本物になる。「親しむ」は入り口の問題ではなく，奥の方にある興味関心ではないか。

おもしろ見つけの発想はどの教科にもある。古典教材のどこにどうハートマークがつけられるか，つけられるような状況が設定されると小学校にも入ってくることができる。例えば「蕭蕭（しょうしょう）」という言葉の響きをもとにイメージがわいて作品の世界が描けたときハートマークがつけられる。音読とかの方法を駆使しながら，イメージがわいたところ，作品世界の意味が描けたところ，感性的な反応ができたところにつくハートマークは，古典の作品の中でどこなのか，子どもが見つけていくにはどうすればよいのかを考えている。

狂言では動きが分かる。ストーリーとか行為とかにおもしろさが見つけられる。発達段階に応じた教材が考えられる。ただし，２年生の「お手紙」は中学校でもできると言われる先生もいる。イメージをとらえるのを小学校，人間関係や意味づけをしていくと中学校でも扱える。おもしろ見つけの視点から考えていくと子どもサイドの教材が見つかるのではないか。

田中先生

読んで分かることがスタートライン。とっかかりがなければ読もうともしない。おもしろ見つけや丸ごと読みはまず分かるところから。そこを手がかりにして切り込んでいく。古典を音読して大体分かるようになるものはなんとかなる。何度か音読に挑戦すると，リズムと内容の理解が同時に進んでいく授業が組まれるとすると，レベルが上がってもさらに同じような方法で読んでいけるという作品配当が考えられないだろうか。

渡邊先生より

はじめに

伝統的な言語文化の教育の充実→古典のとらえ方が広がり近代・現代を含む。
→主体的に学ぶことが内面化につながる。

１　学習指導要領の改訂と「伝統的な言語文化」の教育

（１）小学校（中学校）「総則」の改定要点
◎道徳教育との関連

（２）小学校（中学校）「国語科」の改定要点
◎言語活動の充実と結んだ伝統的言語文化の指導

（３）学習指導要領の「伝統的な言語文化」教育の特色と課題
・戦後「豊かなことばの生活に結ぶこと」→４０年代「言語文化の教授と創造，国語の愛護」→５０年代古典教育の軽減，小学校５，６年に古典が入る→平成年代　国際理解，国際協調の観点から日本人の自覚を促すことをめざす→今回　「我が国と郷土を愛する態度」の育成
・明確な法的根拠（新教育基本法前文）

・「理解」の領域から「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の中で言語活動を通して指導
・小中の一貫…小学校１年生から一貫性をもっている
・教材の課題：ジャンル別に教材が位置付いているのはかえって一貫性が図りにくい
・指導事項の系統の課題：例えば語調，リズムの系統化が図られていない
・指導方法の期待：言語活動３領域を通した指導により，創造的表現（絵画化，シナリオ化…）など多様な工夫が取り入れられる可能性がある。
・創造的な価値発見の教育の課題：強制的指導ともなりかねない。批判的に扱われる。

２「伝統的言語文化」の教育の課題
（１）学ぶ意味→大切さを説得しても無理。古典のよさ，楽しさの実感がもてる授業が大切。
（２）機械的学習指導→古語と文法が分かって口語訳ができれば読めるというのは不十分。
（３）教え込み指導→価値に導き理解させるために覚えることを強いる。
◎関係概念としての古典観…学習者の積極的，主体的な働きかけによって古典の価値が見出されると考える。

３　音読・朗読・暗唱の指導と評価
〇戦後「暗唱」は重視されなかった。第２期暗唱主義。意味も知らずによく覚える時期はある。しかし意味も分からず覚えるのがよいのか？それよりも考える古典をめざしたい。
〇１～２年　　読み聞かせや劇により身体になじみ内面化していき，親しみが実感される。
３～４年　　音読・暗唱による内容の感得，興味・関心の喚起を創作につなぐ。
５～６年　　音読・暗唱・群読を取り入れた読みの工夫の必要性。古典を解説した文章を背景理解に用いて興味・関心を深める。
一貫性が整っていない。効果的に扱うには，系統性が必要。

４　「伝統的言語文化」の教育の充実
〇関係性を育む古典教育の方策
①学習者が学習主体となる学習指導
②教材と学習者の出会いを効果的にする。
③言語的抵抗を少なく、あるいは利用することで教材と学習者との関係性を強める。
④グループ学習など主体的活動が行える場の工夫
⑤学びの方法を学ばせる→古典と創造的に対話しつつ豊かさを得る。
⑥朗読・訳詩・絵画化・劇化・漫画化など創造的な学習の場を設ける。
〇古典教育の目標の系統化
①教材の系統②内容に関する目標の系統③技能に関する目標の系統
低小～高校まで

〇子どもに合った興味のもてるカリキュラムの構想
カリキュラムの視点①入門から成熟へ②感性から理性へ③共同体験から異質体験へ④共感から批判へ⑤自己形成から相対化へ

〇読みの発達と言語能力
小学校　１年　作品世界で遊ぶ
２年　登場人物に同化して読む
３年　経験を総動員して読む
４年　作品全体を俯瞰的に読む
５年　作者と対話しながら読む
６年　自己の生き方と重ねて読む
中学校　１年　客観的に読む

２年　自分の生き方と比べて読む
３年　自分の生き方を開くように読む

〇認識の深化

学習者の発達段階と，興味・関心，教材の難易に配慮しつつ，ジャンルにとらわれずに教材かを大胆に行い，学習者の中で古典をいきいきと機能させたい。その目安としてのテーマを，自然，愛（親子・家族），愛（男女・主従），友情，旅，ことば，戦い，死，命，罪，人間性，状況と人間，思想，などとする。「生命と生き方への根源的な問い」について考える教材にしたい。

５　伝統的な言語文化の教育の基本モデル

「お話大会」で昔話をすることをゴールとして，基本学習（目標を理解し，モデル学習を通じて方法を理解）→応用学習（基本学習の方法を使ってグループの中で昔話のお話をする）→終結（代表による昔話をして感想を交流し楽しむ）と進める。指導者はものの見方・考え方を広げ，深めることをめざすと共にそれぞれの学習活動の場で国語の力を育てることをめざして指導する。

６　古典教育の実際

〇小学校１年生

１年間にわたり「自然」を中心にアンソロジーによる学習指導を　行った。俳句，和歌，詩文，漢詩等が教材として集められた。単なる暗唱でなく，子どもなりに考えを深めた。

〇小学校高学年

「南総里見八犬伝」読みの視点の獲得→群読→ブックトーク→古典作品の読書への発展

〇中学校３年生

「おくのほそ道」単元目標　声の力のなさ，間の取り方の悪さ，効果を考えない発声などの話す聞くの問題から「奥の細道」を教材として学習者の声を鍛え，教室に間を考えた緩やかな話し言葉を取り戻したいと考え実践したもの。「つぶやき学習」全文の通読，発端の朗読「出会い学習」班での役割分担をして朗読練習「確かめ学習」中間発表会，工夫を学び合う「見つめ学習」学習の成果を話し合う「あゆみ学習」魅力の一冊の紹介

〇高校生

「みやび」の世界を歩く。「伊勢物語」和歌のみ訳す。他はそのまま音読。単純なストーリーなので，構造をとらえる授業。初段で「みやび」とは何かを学ぶ。グループに分けて５つくらいの教材文を渡す。「みやび」探しをさせて，紹介し合っていく。

おわりに

伝統的な言語文化を学ぶことが学習者ここに豊かさをもたらすことが実感され，学習者がその学び手として育つことが文化の継承・発展に深く関わる。

浮田先生

旧制中学校では古典は古くても中古までさかのぼると決められていた。古典と呼ばれているものは当時の日常的に使われる文体との日常的な地続き感があったと考えられる。近代の作品も古典として指導するようになったのは現代文との地続き感を大事にされているのではないか。

地続き感があるから現代語訳がなくても指導できたのでは。

浜松の小学校で俳句，柿山伏，論語の実践のまとめとして単元レポートに子どもの様子を書いてもらった。俳句の句会を年間を通してすることで，日記にも表れるようになった。新たなジャンルで古典という読書のジャンルが増えた。という成果が書かれていたが，「親しむ」とは子どものどんな姿が見られたらよいのか。

渡邊先生

子どもにとっては地続き感はかなり今はないといえる。

「親しむ」とは高校までのスパンを考えると，最終的に受け止めて批評していく。①感性的に慣れる②自分の関わりで受け止める③評価する（批評する）

田中先生

めざすところは表層的ではないだろう。地続き感について，竹取物語を３時間で訳をつけないことでも主題まで考えられた。物語を読むときにはどこに目をつけるかという読み方を使っていった。現代文を読む姿勢で読めることを実感させていった。読む力を育てるとなると古典でありながら物語や小説の授業でもあるとも言える。

渡邊先生

文学の構造は共通している。読んで明らかになることがおもしろくないといけないことは必然。

石戸谷さん

地続き感をつなぐより断絶した方がよい教材もあるのでは？平家の残酷さは距離を置かなければ親しめないのでは？

小川先生

説明的文章の中にも描写があり，文学を読むときとある意味地続きがある。しかし，説明的文章の特質が見えなくなる。伝統的な言語の楽しさを味わうこととの距離感は必要では。

田中先生

発達段階で視野の広がりが措定されている。内容面では，自分の身近な人との視点から社会的な視点へと俯瞰する視点を獲得していくと考える。古典という時間を隔てた作品が共通していると言うことは今を対象化する学びになる。異質感も古典を学ぶ大切さ。共通性を意識しつつ違いが必要。

浮田先生

地続き感は，古典に限らない。「わらぐつの中の神様」「モチモチの木」の世界でも今とは地続きではないところがある。

渡邊先生

①読みの方法の地続き。これは続いている。
②生活・表現レベルの地続き。今はたくさんなくなってきている。
③内容面の地続き。平家の異質な部分。共感・批判 は発達課題で変わる。

磯野先生

現代の読書と古典を読むことの違いが必要ではないか。５年の作者と対話するとあるが，古典の作者は重い。資料の読み方がそのまま使えるのか。

渡邊先生

生身の作者ではなく，語り手ぐらいを考えている。その方がクリエイティブに読むことができる。作者は本文や表現から想像される作者。

小川先生

国家戦略だが，グローバルに生きるには伝統的な言語文化の感覚も必要。
道徳と結び付けると，古典を典型としてとらえる発想が存在しているように思う。
これから古典を読むということはどういうことか，田中先生の言われる言語生活力の観点のどこに位置付くのか見えてくると関係概念としてとらえる古典観がはっきりとしてくる。